アダム・スミス自然神学と経済生活の視座

村 越 好 男

Adam Smith's Natural Theology and his System of Social Science

Yoshio Murakoshi

Smith's Moral Philosophy is composed of four parts: natural theology, ethics, natural jurisprudence, and political economy. This article will attempt to show the significance of natural theology as the foundation of Smith's system of social science.

Based upon the concept 'Moral Government of Deity', natural theology enables moral philosophy to deal with both theological arguments concerning the ontological framework of all beings and empirical social scientific issues simultaneously and in a unified manner. The concept functions by connecting the realization of God's final goal and the works of His efficient causes which are preprogrammed and implanted into human nature so as to unintentionally realize the Deity's Design through free and secular human activities.

一 問題の所在

経済学の定礎者は経済学史では一七七六年に『諸国民の富』を書いたアダム・スミスとされている。⁽¹⁾ ゆえに、各々の時代が深刻な問題に直面する毎に、自身を根本から反省する基軸として、経済学はスミスに立ち戻り、自らを始源から問い直そうとし、それがスミス研究熱の歴史的持続の原動力となっている。だが経済学の始祖スミスへの問題関心は、独り経済学に限られている訳ではない。政治学、社会学などの社会科学からの研究、そして法学、歴史学は言うに及ばず、倫理学・思想史・哲学からもスミスに光があてられている。かくて関心の量、領域の広さ、取り上げる主題の多様さにおいて他の社会科学の巨星K・マルクス、M・ウェーバーに決して劣らぬものとなっている。⁽²⁾

かようなスミスへの関心に多様性をもたらす最大の理由が経済学の始祖という歴史的意義にあるのは言うまでもない。だが決してそれが理由の全てではなく、スミス自身の学問関心の広さが一因をなしているのを忘れてはならない。スミスの学的関心は実に神学にまで及ぶほど広範⁽³⁾であり、そうした経済学を超えた視角から経済問題を多角的に考察した帰結として経済学が誕生したのであるから、スミス経済学には経済を学際的に見直す契機を内包しているのである。しかしながら、スミスの関心が神学にまで及んでいた事が、学問的世界、特に経済学において十分に評価されているとは言い難い。

スミスは一七五一年にグラスゴー大学の道徳哲学講座に着座⁽⁴⁾したのだが、道徳哲学は第一部に自然神学、第二部に倫理学、第三部に自然法学、そして第四部に政治経済学⁽⁵⁾から構成されており、その第四部での考察を基盤に『諸

国民の富』が誕生したのである。経済学が道徳哲学を母胎として誕生したのであれば、経済学をその出自から問い直そうとすれば、関心を第四部門の経済学領域のみに限定する事は許されず、当然他の三部門との体系的関連性が問題となってくる。その帰結として、スミス研究が多様なものとなるのも至極当然と言えよう。経済学を根本から見直すならば、始源の持っていた道徳哲学という大きな枠組に戻り経済を問うことが必要となるのである。

そこで本稿は、道徳哲学体系において、神学と経済学、宗教生活と経済生活との関連性について考察したスミスに注目した。通常、神学と経済学は、学問的方法原理において、両極端の位置にあるため、互いに疎遠になりがちであり、また経済と宗教は背反的な関係にある基本原理に立脚するため、互いに、排他的になりがちである。その両者の持つ社会的重要性にもかかわらず学問的同時考察が成立し難い宗教と経済、神学と経済学とを同時に視野に収めたスミス体系は歴史的に稀有な例と言えよう。

そこで本稿はスミスの道徳哲学体系の第一部門自然神学を単なる体系の前提として自明視せず、むしろそれを神学の実践部門である倫理神学の観点から考察してゆきたい。またそうして検討した神学的視座がどのように社会諸科学のテーマ、具体的概念装置、体系構成へと結実していくのか、つまり倫理学、法学、政治学、経済学への具体的に展開する過程を検討し、最後に倫理神学の課題としての経済問題が持つ意味を検討してゆきたい。

二 道徳哲学体系の基本枠組——自然神学

二—一 スミス自然神学Ⅱ 理神論？

スミスの道徳哲学体系第一部門である「自然神学」については、経済学説史の常套手段として、一八世紀スコッ

トランドでは衰退期のしかも末期の様相を呈していた「理神論」の内容をそこに代置することで済ませていた。そうするにはそれなりの理由があるからである。まず第一の理由として、スミス自然神学の資料的欠如がある。道徳哲学の第二部倫理学の内容は「道徳感情論」(一七五九)そして第四部の政治経済学は「諸国民の富」(一七七六)によつて窺い知る事ができる。しかるに、その他二つの部門は深刻な資料的問題に直面している。スミス自身が公刊した二冊、それに加え遺稿集として出されることになる「哲学論文集」を除いた未刊行の草稿類のすべてを、スミスは死を目前にして遺言執行人に命じ、焼却処分させたのである。その中に自然神学に関する講義ノートも含まれていた。ところが第三部自然法学については、異なる二つの時期に受講した学生の講義ノートが発見され、そのおかげで間接的ながらもスミス自然法学の様相をつかむ事が可能となっている。しかるに第一部門自然神学に関しては、第一次、第二次資料のいずれにおいても、資料的欠如の問題に直面しており、それが研究の大きな妨げとなっている。また第二の理由は、経験科学的側面が強調される時代にあつては、第一部門の自然神学は一つのエピソード、巨匠の気まぐれとして受けとめられたことである。スミスの本領である経験的な学としての倫理学、法学、政治経済学を理解するために、自然神学の理解なしでも成立しうるので、第一部門は単なる装飾、いやむしろ経験学として定評のある他の三部門の価値を損ないかねない危険性を含んだ異質な要素の混在であるとみなされていたのである。ゆえにそれだけでなくとも資料的問題がある上に、知的好奇心に支えられなければスミス自然神学への関心も希薄なものとなってしまう。こうした二つの理由以上に決定的理由となっているのは第三の理由である。スミス道徳哲学の受講生の証言により、スミスは自然神学として「神の存在証明と属性、そして宗教がよつて立つところの精神の諸原理」を講じていたことだけは確認されている。ところがそうした内容でもつて自然神学を講じたのはスミスに限られず、一八世紀スコットランドではむしろ一般的なことであった。「天才の温床」と称された思想家

達、グラスゴー大学ではスミスの恩師F・ハチソン、スミスの後任者となるT・リード、エジンバラ大学ではA・フアーグソン、D・スチュワート、また在野ではケームズ、そして批判的意図をもつてではあるが盟友D・ヒュームなどが道徳哲学体系における自然神学を扱っていたのである。そうした同時代が共有する自然神学理解を準拠枠としてスミスの受講生が報告した自然神学の内容を推測してみれば、せいぜい「理神論」に相当する内容しか見いだせない。そこでスミス自然神学自体には、彼の同時代の理解に対しても、何か新たに積極的な〈神学的〉内容は見られないと結論づけられたのである。

ところが環境問題などの深刻な問題に直面し、経済学至上主義や経験科学至上主義が見直されるような現代にあつては、第二の理由がスミス神学への関心を阻害する度合いはかなり弱まり、スミス自然神学への関心が惹起される機運が訪れても、第三の理由つまりスミス自然神学がそれ自体として見るべきところがないという神学的評価がスミス神学への研究関心に冷や水を注いでいる。ゆえにスコットランド啓蒙への研究熱の渦中にあつて、他の同時代人の自然神学に光が当てられることがあつても、スミス自然神学への関心にはつながつてこない。ましてや残された検討課題、自然神学とのかかわりを基盤としたスミスの他三部門である経験諸科学のもつ意義は問わずじまいであつた。

二・二 「啓蒙の社会科学の形成母体」としてのスミス自然神学

ところが、一九八〇年代中盤以降になると、スミスの自然神学それ自体を主題とする研究が登場してきたのである。⁽¹²⁾ その中でも田中正司氏⁽¹³⁾の自然神学研究が傑出してゐる。田中氏の研究の端緒はJ・ロック研究⁽¹⁴⁾であり、ロックに市民社会論の原型を見いだし、その後近代自然法論を基盤とした啓蒙の経験論的社会科学を系譜的に辿

り、そうした研究の累積の到達点にスミス経済学の誕生を見ている。その田中氏はスミスによる経済学誕生の意義を十全に理解しようとするならば、自然神学抜きではありえないと主張する。その主張の背後に歴然とした思想的課題を見ているのである。スミスによる経済学誕生によつて経験科学としての社会科学が全き意味において成立したという意義が十分に理解できるためには、市民社会論の原型を築いたロックを更に遡り、ホッブスが残した問題を見なければならぬと言う。ホッブスが神学や倫理学との齟齬という犠牲の上に、田中氏の言葉によれば「自然法学（地上の正義論）と道德神学との分界論」つまり「地上の正義と神の正義との分界」という問題を残した上に成立した政治学は、単科の科学として見れば学としての自立を果たしたと言えようが、「生きた生身の人間を対象とする」人間の学たるべき社会科学の本来的課題からすれば、「人間関係の真実」を求める「道德神学の主題」と背馳して論理領域を設定しているのであり、その限りにおいては、社会科学として本来答えるべき課題は残されたままであることを意味する。その意味で社会科学の自立を完遂したとは言えないのである。この一七世紀が残した思想史的課題との格闘が一八世紀スコットランド啓蒙のなすべき共通主題であり、それに対する解答として、一七世紀の近代自然法的伝統を経験・主体化して受容する具体的課題を進めるにあたり、神学をも視野に入れ、総合的な人間学としての社会科学の全面的展開を成し遂げて、初めて社会科学は自立しえたと言えるであろう。そうした意味で田中氏は、スミス自然神学を「啓蒙の社会科学の形成母体」として評価するのである。

二―3 倫理神学としてのスミス自然神学

田中氏は、スミス自然神学の問題としては、スミス自然神学の受講生が報告した「神の存在証明と諸属性に関する議論」が何であったかよりは、スミスの思想形成におけるハチスン、ケイムズからの批判的継承または彼等との

知的格闘の動態を辿ることの方が思想的に有意義な課題だと主張している。つまり彼等の「カルヴァン主義的な予定・原罪・贖罪等の長老派カルヴァン主義の教義をそれとして承認した上での作用↓目的のデザイン論証を主題」とした「道徳神学」における共通課題をどのようにスミスが受け止めたのかを確認することが、社会科学体系つまり経験的倫理学、自然法学、経済学の主題と展開を理解する上で不可欠だと主張している。そうした有意義な問題設定に成功した田中氏は、スミス自然神学の研究を本格的に成し遂げたのみならず、自然神学が他の三部門にわたっての単なる飾りどころか、むしろそれを基礎で支えるものであることを十分に立証した。

本稿では、田中氏が前提したような長老派カルヴァン主義の教義を理論前提として継承し社会科学を導き出すのではなく、むしろ村越が再構成したスミス自然神学の内容「神の存在証明と諸属性及びスミス自然宗教」を基盤としてスミス自然神学にアプローチし、そして自然神学を基礎枠組として経験的諸科学である他三部門がどのように展開されていったのかを検討してゆきたい。

(a) 神と共にある人間生活——スミス世界観の基本論理

スミスの思想的課題が、人間学として神学をも視野に収めた社会科学の設立にあるとしたならば、それが成功するかどうかは、その全体的枠組の基盤の位置にある自然神学が包括的かつ体系的な世界観・人間観を提供できるかどうかにかかってくる。

スミスの基本的世界観によれば、神は「全知・全善」という属性を有し、またこの世を創造した創造主であり、そして終末の時には、「全宇宙に普く幸福を充満」すべく慈愛的目的を持って統治する存在だとされている(Moral Government of Deity)⁽¹⁵⁾。神の属性が全知・全善であり、自らの意図した通りに実現する力がある「完全な存在」であるのに対し、その神に創造された人間は、その知識はもちろん能力も有限であり、自己の意図した帰結

を100%実現することのできない「不完全な存在」だとされている。ところがその人間は「意図せぬ神の協力者」(the created creator)として意義づけられている。こうした神との関わりにおいて生きる人間論を基礎に道徳哲学は展開されて行く。

(b) 神の慈愛的統治 (Moral Government) と経験論的倫理学

こうした世界観が最も具体的に展開されているのは、スミスの自然宗教論である。その枠組は神と人間の属性の展開に基づいて構成されている。神はその慈愛的存在性から、慈愛的意図を普く全宇宙に充満させる目的を持ち、またその慈愛的意図を完全に実現できる能力があるので、行為論としては神の行動原理は単一の原理「慈愛」(benevolence)⁽¹⁹⁾で構成される。目的である慈愛的統治をなす手段となるのが、一般的諸規則 (general rules)⁽²⁰⁾なのである。この諸規則が自然科学においては自然の法則 (the laws of nature)、また道徳論では徳性 (natural order) として理解されているものになってゆく。これが全存在を規定する基本的枠組を構成している。これを「神の慈愛的統治」図式としておこう。

さて人間は、神とは反対に、その存在性からして不完全であるので、行為前の意図を完全には実現しえない。そうした人間の存在的境界を熟知している聡明な神は、創造の際に、諸種類の感覚原理を人間本性の内に植えつけ、複雑多様な生活の場面にあって、人間に自分自身の幸福の基礎を確保させ、またひいては意図せぬうちに創造主の意図の実現に寄与すべき存在となりうるような機構を人間の内に内蔵しておいた。そうし

た存在關係を基に神の慈愛的統治図式が以下のように構成される。神の慈愛的統治の手段である「一般的諸規則」(General rules)は、經驗的倫理学にとってはそれが説明すべき対象(目的)となるのであるが、神学としての倫理学は、一般的諸規則を神学と共有することによって、徳性として人間行動を規制し、それによって神の目的實現に結果的に寄与する能力を帯びる。その徳性論を経験的觀點から見れば、その規制原理である一般的規則がどのように自然的諸原理から導き出されるかを説明することが倫理学の主題となる。つまり倫理学は倫理的行動の作用因となる人間的諸感覺(natural senses)がどのように機能し、その結果として、神の慈愛的統治の手段である自然的諸規則がどのように導出されるのかを説明する学となる。こうした經驗的倫理学としての徳論は、自然神学の観点からみれば、神の意図する全善の帰結つまり慈愛的統治の意図の全き實現をもたらす手段系列という位置に置かれたものであることがわかる。

(c) 自然宗教——倫理学の原型

歴史の主である神は、全善の帰結を歴史のいずれの段階でも實現するように配備しているとスミスは想定している。ゆえに歴史の原初的段階においても、意図せぬうちに、人間が神の普遍的愛の實現に寄与するべく配備されているが、その原初的段階における實現のための補完領域が宗教だとスミスは考えている。

これを自然神学の枠組からみれば、神の意図する全善の帰結をもたらすための作用因として機能することになる。自然的諸原理は、宗教生活における偉大なる存在への恐れ⁽²¹⁾の觀念、そして神的存在により定められた法の遵守への報奨と違反への天罰の觀念として作動を始める。この宗教が果たす原初的な全善の帰結をもたらすメカニズムを精緻に説明するのが經驗的倫理学にとつての課題となる。そのため、人類の原初的段階に自然神学が持つ神の慈愛的統治図式が援用され、宗教が最初⁽²²⁾に倫理学が解明すべき課題として注目されている。そこでスミスが人間学的存在

規定から宗教哲学的考察へと展開してゆく過程を確認しておこう。

スミスはまず宗教生活における二側面にまず注目している。

「信心業——神的存在への内的崇拜行為

「道德生活——神的存在への外的崇拜行為

スミスは、未開の段階において、人が意図せぬうちに、自分に対してもまた他に対しても、結果的に全善の帰結をもたらすメカニズムが、人間本性の構造の内に創造主によって設定されていると想定している。そうした宗教生活によって醸成される自然的諸原理（道德的諸感覺）が「義務の感覺」（神的存在への顧慮を基礎とした生活態度）および「正義の感覺」（法の遵守への動機づけ）⁽²³⁾なのである。原初的生活における主要部分をなす宗教が、特にならなくても外的崇拜行為が倫理の原型となる二つの感覺、自然的諸原理を作用させそれによって全善の帰結へと導いていた。ところが時代も進み、人間の道德的能力（moral faculty）が高まるにつれ、人間は倫理的責務の自主的・自覺的遂行を企図できるように道德的自律が可能となる。そこに登場してきたのが、啓蒙の倫理学なのだとスミスは見ている。

倫理学の原初的形態として自然宗教が、神の慈愛的統治図式において占めていた役割を、道德的行為主体としての人間が主体的に担ってゆくにつれ、經驗的倫理学が果たす領域が拡大してゆく。

三 神の慈愛的統治図式における社会科学の展開

スミス道德哲学第二部門の倫理学は、確かに經驗的倫理学だけとして見れば「同感」(sympathy)を道德的行為

の説明原理として展開されたものであり、スミスの著書『道徳情操論』の主題に関して一般に神学とは独立した倫理としての評価が確立している。しかしながらスミスの倫理学には経験的な面のみに限られるのではなく、むしろ別の面、自然神学枠組における道徳哲学第二部門の倫理学としての課題もあることは忘れられている。自然神学枠組における倫理学とは、不完全な存在にすぎない人間が、人間の存在理由ともなる意図せぬ内にはあるが、神の協力者という存在性を前提にして、神への意図せぬ協力者にふさわしい者としての行為とはどのようなものなのかを説明することが課題²⁴となっている。

三―I 倫理学の範囲――自然的原理（作用因）――一般的諸規則（目的因）

スミスは経験的倫理学では「同感」(sympathy)を分析概念として、従来の道徳論の主題とされてきた徳性論を検討している。ある人間行為が道徳的であるかどうかが判断される場面では、その行為者の動機が問われる場合と、動機がどのようなものであれ行為のもたらす帰結が問題とされる場合とがある。そのいずれにおいても、スミスは判断原理に同感を用いて総合的に分析している。ところでこうした道徳判断における二分性が生じるのは、人間的行為の意図と行為の帰結との間に存する人間の支配力の不完全性に基づいている。神の場合、動機と帰結との間に亀裂も錯誤もなく意図した通りに実現できるのだが、人間の場合はそうではない。そこで創造主は人間を神の協力者にふさわしい者になすべく、人間に対し諸感覚(senses)を人間本性(human nature)の中に構造的に植えつけ、その結果人間が意図せずとも行為が全善の帰結をもたらすようなへ秘密のシステムを人間創造の際に整備しておいた。そうした自然的諸原理(道徳的諸感覚)には人間行為を誘発するもの、規制因として調整するもの、目的実現へと最終的に誘導因として働くものなどがある。そうした自然的諸原理の機能(倫理現象を引き起こ

す作用因)に対応させて、従来の倫理学が扱った徳性つまり一般的諸規則(倫理の到達点——目的因)を、スミスは「同感」を用いて分析的に説明しているのである。この経験的倫理学では、同感を(ニュートンの「重力」のように)説明原理として使用し、自然的諸原理(倫理の作用因)を分析し、それぞれの感覚の作用の上に成立する徳性(行為の一般的諸規則)を導出するまでの範囲を倫理学が扱う問題としている。ところがその倫理学の考察の目的である徳性(一般的諸規則 general rules)は、慈愛的統治図式においては神の道德的支配の手段系列と共有している、そこで接合されており、それが神の究極的目的である幸福の全宇宙への普遍的分配、つまり行為の全善の帰結の実現という論理に接続されているのである。こうした意味で倫理学はそれ自体として見れば独立した学となつてゐるが、神学の観点から整理すれば、自然神学の第二部門としての役割をも担つてゐるのである。

三—2 全善の帰結をもたらす自然的構造——自然神学としての倫理学の課題

自然神学第二部門としての倫理学が担う課題は、普遍的慈愛の実現という神の目的に対して、その協力者たるべく創造された人間の行為が、どのようにして究極目的に役立つのかという問題に答えるものでなくてはならない。スミスはその課題を、不完全な存在である人間の存在性を熟知した神が、それを助けて導く神助のメカニズムがあるために、全善の帰結⁽²⁵⁾が達成されると想定することで解決している。

(a)二つの基準——聖なる者のための基準と通常人のための基準

スミスは、スミス以前の倫理学が主題として扱ってきた徳論は、平凡で世俗的な大衆に対しても、完徳の存在となるべく修養することが、神の協力者としての人間が目指すべき唯一の道だと要請している点を批判している。スミスはこのような枢要徳つまり完全な慎慮・正義・仁恵の規則に即した「聖なる人」の行動を道德の基準としたも

のを第一基準の道德論と称している。このような崇高な道德基準は、スミスによれば人間の属性である不完全存在性を無視した議論であり、全人類の中でも寡少数の卓越した人間にしか実現しえない行為論にすぎず、それは不完全な存在そのものである一般大衆のための行動指針とはなりえないとスミスは見ている。それ以上に問題となるのは、そうした例外的に卓越した少数の行為の結果にのみ頼り、全宇宙への幸福の分配という壮大な神のプログラムが依拠して実現するとは想定しがたいとスミスは批判している。スミスは、むしろ賢明な存在は大多數の劣った人間の属性である不完全存在性を踏まえ、その上で人間と神との関係を前提にした神助によって全善の帰結をもたらす存在であることに注目する。それに適合した第二基準の一般大衆のための道德論を提唱する。この道德論の確立をスミスが経験論的倫理学の主題としたのである。

(b) 第二基準の道德基準——義務の感覚、適宜性の感覚、正義の感覚

そこで、スミスは第二基準の道德論を通常の程度で倫理的に是認される行為に見いだしている。通常の程度の倫理的行為ならば、大多數の平凡な一般大衆であっても実行可能であり、また自己の行為のもたらす帰結について正確な知識を持つことなしに行為するのであるから、その行為がもたらす遠い全善の帰結が値する報償が見えていないのでそれに目がくらむこともない。こうした通常の程度の倫理的に申し分のない行為が全善の帰結をもたらすことが可能となるのは、神自らが人間の足りないところを、神助をもつて、補ってくれるからだとしてスミスは議論する。これがスミスの経綸 (Oeconomia) 論の中心論理⁽²⁶⁾を構成しているのである。

自然神学が道德哲学体系の全体的基本枠組を構成し、そこで神の慈愛的統治図式が神と人間との仲介をなし、神の道德的統治のための補完手段として具体化した経綸論を基盤にして、それぞれ道德哲学の下部体系である倫理学、法学、政治経済学と展開させて行く。

(c) 自然神学第二部門としての倫理学

そうした最初の課題が倫理学として全善の帰結をもたらす機構の分析として進められることになる。スミスは全善の帰結をもたらす通常の程度の倫理的行為とは、経験的検討の結果、「正義の感覚と適宜性の感覚の示唆するところに従って行為する行為、つまり義務の感覚」に即した行為だと結論づけている。こうした諸感覚こそ、創造主が、聡明にも人間本性の中に植えつけ、神の意図せぬ協力者となるべく設定した「秘密の機構」(secret mechanism)なのである。スミスはこの「秘密の機構」を「人間本性の構造」と称した当時の自然神学的用語を、経験的側面だけを強調しようと思えば全て経験的ニュアンスを持った用語にふりかえれたにもかかわらず、それを継承して使用している。そうした神(自然)が移植した「自然的諸原理」である感覚が作用因としての機能を果たすところに成立する全善の帰結を、「同感」を用いて説明していくのが経験論的倫理学の課題なのである。

ところが、最大の問題は実践の場面であり、そうした諸感覚が指示する倫理的指針は人・場所が異なるにつれ別様多様なものとなり、やがて複雑多様な道徳的判断の事例が累積され、その結果、一般的諸規則のすべてを、常人はもちろんのこと倫理学者にも、認識しきれない。ましてや行為の帰結を念頭に置き、完全に規則に添った行為をなすのは通常人には不可能となる。

スミスの倫理学者としての真骨頂は、実践論として全善の帰結をもたらす人間行為を、「同感」を用いて簡単にまとめ、わかりやすい行為指針を確立したところにある。つまり正義の諸規則と「公平な観察者の同感」を常に顧慮して自己の行為を制御(command)して行為をなした時、そうした通常の程度の道徳的努力が、神助と秘密の機構とが「共働」することによって全善の結果をもたらすことを明らかにした。だから通常人にあつては、複雑な倫理学を知らなくとも、また到底実行しえそうにもない卓越した徳性を実行できなくとも、その簡単な指針に従い

さえすれば人が神の意図せぬうちに協力者にふさわしい存在たりえるのである。その彼がなすべきことは、実行可能な作用因の促しである「公平な観察者の同感」つまり「良心」(conscience)「胸中の半神」の声に従って生きること、道徳的存在となるべく努めることである。そうした道徳的努力の帰結は、自己に幸福をもたらすのみならず、神の協力者としての精一杯の努力が、全善の帰結へと聖化され、協力者に与えられた使命が全うされるのである。

(d)「良心」——自然神学から倫理の領域に派遣された使者 (agent)

スミスが問題にした同感に基づく経験的倫理学の主題は、現代的に言えば、「良心」がどのような人間的行為を是認したり、否認するのかを、説明することにある。その良心を自然神学から見れば人間本性の中に内蔵された神的存在から派遣された使者まさに「胸中の半神」なのである。この使者が、情念などの本源的情動を導いてくれるので、意図せぬ全善の帰結をあまねく分配するという神のデザインにつながる壮大な任務の遂行を実際に可能とするのである。

三—3 利他心と法学・政治学——自然神学としての自然法学の課題

スミスは人間の行為が倫理的に判断される場合には、動機において同感されるタイプの行為と、行為の帰結についての同感によって成立するタイプの行為がある点にスミスは注目している。スミスは、そうした二つの異なる判断を「利他心」の発露がもたらす行為に向け、それを展開した上に政治学、自然法学の学的基礎づけを行っている。

スミスは利他心に見られる特徴的な性格に注目し、一つは積極的・直接的に他者に利する目的で行われる積極的

な利他心と、逆に自己の行為が「他者の生命・財産」に害をもたらす負の帰結を最小限に抑えるという意味での消極的な利他心とに別けて分析してゆく。この前者の積極的な利他心という自然的原理の発露から導出される慈恵の一般的規則の上に政治学を、そして後者の消極的な利他心という自然的原理の発露から導出される正義の一般的規則の上に自然法学を基礎づけて行く。⁽²⁷⁾

政治学は政治担当者の行為論であり、理性的な権力行使による人的統治 (Government) 論が展開される。その学の基礎となるのは、政府がその統治下にある人を導いて利他的行動を強制的に行わせる活動つまり権力 (power) の行使に政治行為の本質があるとスミスは見ている。通常政府は自身の行動原理を自然的原理の一つである理性に求め、その理性的配慮に基づき領民に政策を施し、人為的に福利と平和を達成すべく政治的課題を担うことになる。ところがそうした政治的統治 (governance) の理論的準拠枠は、倫理学の観点から見れば、慈恵の徳に関する一般的諸規則となるのだが、その規則自体は余りにも例外の多いものとなっているため、原理・原則的適応を旨とする理性の仕事にはそぐわないし、そう試みたところで全善の帰結は人為的には達成し得ないことを倫理的に論証する。そこでスミスは、積極的な利他心の発露に関しては、行為の帰結を権力をもって強制して実現させる政治的文脈ではなく、逆の面、利他心の動機の面の方を問題とする倫理の領域が担うことによってよりよく実現されることを論証した。つまり利他心の発露は良心によって同感されるべく行為者が統御することによって、むしろ結果的には全善の帰結を同胞の国民に普くもたらすことを社会科学的に論証している。この結論こそが自然神学としての倫理学が担った分配的正義を実現する課題なのである。

だがこのことは、スミスが、政府の権力に基づいた活動を一つも認めないという訳ではない。政府が強制力を用いて、人民に守らさせる必要があるのは、政府のみにしかできない仕事の遂行であり、その中でも特に司法の執行

があるという。司法行為の基礎は消極的利他心の発露にあり、その行為内容は倫理学的に見れば正義の規則の厳密な遵守つまり負の幸福の最小化実現にある。その規則遵守への強制こそ政府がなすに相應しい活動なのである。その法的規制に本性的な責務とは、人の生命・権利への侵害を強制的に規制する懲罰 (sanction) を基礎にした規則が展開されることである。刑法、他者の財産・契約への侵犯の回避を基礎に展開される民法・商法体系は、倫理学的には良心の被害者への憤慨への同感から導出される正義の一般的規則の上に築かれる。消極的利他心から導出される正義の一般的諸規則、つまり負の帰結を他者にもたらさないように配慮した行為の実現に導く強制こそ、政府に与えられた理性原理を生かすのに相應しい活動領域だとミスは見えている。領民への幸福の分配に関する政治的支配は、道徳的支配 (Moral Government) を企図する神から人民政府 (Government) に任されてはおらず、政府に任じたのは、幸福の基礎条件の整備つまり消極的正義のこの世における実現の方なのである。

人民が互いの社会生活において、他者の幸福に対して寄与しうる能力を誤ることなく発現しうるのは厳密な正義の規則の遵守によってであって、政治学が企図した積極的利他心からなる徳、仁恵の諸規則の帰結的实现を完全に統御し調整する立場に人間はないことを自然神学的に論証した。幸福分配の仕事は道徳領域を通して、神が直接に道徳的に統治 (Moral Government) しているのである。仁恵の徳の実現、つまり全善の行為帰結は、人民の主体的・自発的利他心の実行に関して倫理学が持ち出した第二基準、公平な観察者に同感してもらえる程度にまで利他心を高めた時 (通常は必要レベルより低くなりがち)、その行為は、行為者が意図もしなかった全善の帰結へと導きである神助のおかげで変質 (transform) されることによって、幸福の普遍的分配が実現される。このように幸福の普遍的实现という神の協力者としての責務に関しては、積極的利他心の行使を政治ではなく「倫理」の領域が担っていることを確認している。

三—4 欺瞞理論と幸福の普遍的分配——自然神学としての経済学

スミスの自然神学における神の慈愛的統治図式によれば、人間は神の全宇宙への道德的統治下にあり、その枠組の内にあつて神の幸福の普遍的分配に協力する者という存在であつた。その任務は、人間が究極的に人間本性を完成できれば、人間に任される領域も増えてくるであろうが、歴史において、ほとんど大多数の人間は究極的理想的状态からは程遠いと考えられている。つまり人間の欠ける所が大きいことを意味する。そうなればなるほど、神助が補完すべき領域が社会領域で増えてくることになる。この神助的補完の論理が、人間の責務である幸福の普遍的分配実現の場面に用いられる。幸福分配において人間が果たすべき道德的責務の大きさは、その人の道德的能力(moral faculty)つまり同感による道德情操の洗練度に比例するとスミスは見ている。道德的能力に欠ける者であっても、彼がなした精一杯の善行に対しては、神の側からそれを完全な善行へと変え、行為者が意図もしなかつた他者の幸福の増進をもたらすのである。そうした「秘密の機構」による全善の帰結実現の秘訣を、人間社会の内に、神は配備しておいてくれたという論理をスミスは経済の領域でも使用している。

その「秘密の機構」が、経済の領域では、「神の見えざる手」としての市場機構なのであり、それを通して交換行為がなされればその帰結として福利の普遍的達成が「神の見えざる手」の導きによって実現していくのである。

さて経済現象を促す自然的原理は利己心にある。このことは古くから知られており、ゆえに倫理学では利己的情念に基づく自己愛に古くから警戒してきた。それは動機がそれ自体反倫理的だという点にある。しかるにスミスは政治学の場合には、人間行為の帰結として普遍的幸福を達成させる能力が人間には欠けていると指摘したが、それとは対照的に、経済行為の場合、動機が不純であつてもそこに神助が働き、また人間の側で道德的規制のもとに行ふようになるれば、利己心に基づく行為といえども結果的に望ましくなるのだと論証して行く。

倫理学が示す「全善」の帰結をもたらすための道徳的行為に従って市場に参加する人とは、まずその行為の帰結が他者の生命や財産を損わぬよう厳密に正義の一般的諸規則に準拠して行動する人であり、また公平な第三者に同感してもらえるように自分の行動を制御 (self command) する通常の程度の「自己規制の徳」に配慮する人である。その人が利己的な情感に誘発されて行う取り引きは、それが市場で公正に行われるのであれば、「私益の追求が結果的には公益の実を結ぶ」のである。このように利己的動機に源泉をもつ経済的行為も、神的存在が倫理の領域に遣わした胸中の半神である良心の導きに従い、また経済市場に遣わされた「自然真實価格」に導かれて行為をするならば、「神のみえざる手」の支えによって、全善の帰結である自分や家族の幸福の基礎となる必需品を必要とだけ受け（分配的正義の享受）、また市場の交換を通して普遍的幸福の分配に意図せぬうちに参与し、協力者としての責務を果たすようになるのである。こうした意味で、スミスの経験的倫理学、自然法学、政治経済学は、宗教や神学からの離脱や攻撃そして無視を意図するものではなく、それと矛盾することなくむしろ両立するものであることを、スミスは自然神学議論として「見えざる手」の論理を通して論証していったのである。

四 スミス自然神学と神の道徳的支配秩序——エコノミー

四—1 啓蒙の社会科学は倫理神学との共通領域

田中氏は、近代自然法と社会科学との相互作用がおりなす動態を理解する試みの積み重ねから、スミス自然神学研究に至った。田中氏が解明したように、スミスは贖罪論と欺瞞理論という概念を自然神学において醸成できたからこそ社会科学の自立を遂行しえたのである。作用因としての利己心の発露としての経済行為そして自由権に基づ

く社会科学的行为を基礎から支える論理を、贖罪論から導き出し、そこでその作用因と欺瞞論とを連結させることにより、そこに結果的に意図すらしていなかった神のデザイン実現を見ている。社会科学の自立のためには、田中氏もふれているように、人間が自由に作用因として自由に活動できる領域を確保させる論理が不可避である。その論理とは神の側から救済のためにこの世に派遣された神の子キリストの受難が果たした贖罪論なのである。そのおかげで人間は真に自由を享受できるようになったのである。この贖罪論の導入により、目的論としての神の行動原理である神学（天上界での正義）とその目的と結ばれた作用因としての人間の行動原理（地上界の正義）とが初めて結び合わされたのであり、ホッブス以来の二分界状態に決着をつけ、神学と分離した領域でのみ展開が可能であった近代自然的社会科学の全体を神学によって基礎づけることを可能としたのである。

しかし田中氏が社会科学の領域で見落としているのは、社会科学を基礎から神学的に支え、しかも社会的領域の核心的構造として現存して機能している神助の補完的介入つまり「見えざる手」（エコノミー）の論理なのである。本稿では、詳しく論じる余裕がなかったが、自然神学から派遣された使者（*agent*）——倫理学での「良心」、自然法学での「正義」そして経済学での「自然真実価格」——は、一方では全く経験論的な社会科学の議論に耐え得るだけの内実を持った機能的な概念なのであるが、それはまた同時に「神の道徳的支配」図式からみれば神の慈愛的統治（*Oeconomy*）を達成するための作用因としての機能を担ったものであり、自然的原理の働きを補完し、全善の帰結の実現へと導く鍵概念として構造化されたものであったのである。こうした二重性があることを見逃すのは、純粹な社会科学概念の裏面において神学的な議論が共時的に進行しうる可能性を念頭に置いてないからであるように思われる。現象が経験科学的概念で説明し尽したのであれば、その裏面には何もないという「死せる」自然観の想定が作用しているからのように思われる。スミスはこの二重性の論理を神学や宗教界からの経験科

学への批判に応える手段として活用し、自然の裏で働いている神の見えざる手の論理を描き出すことによって、経験科学が宗教と両立するものであることを、神学議論と矛盾するものではないことを論証するために、積極的に自然神学枠組を用い、道徳哲学の正当性を弁護したのである。

四―2 神の慈愛的統治図式 (Oeconomy) と経済 (Economy)

本稿が試みたのは、スミス自然神学それ自体には神学としての意義はほとんどないと評価されるにしても、それでも尚神学にとつての意義は十分にスミスの体系にはあることに光をあてることであつた。特に実践学としての倫理神学にとつてスミスの体系が内包している可能性は見逃せないことを強調しておきたい。スミスが人間の存在性を確認することから議論を起し、そこから倫理神学の枠組に戻り、神と人との関わりを基盤として、倫理学、自然法学、政治学そして経済学を神学的図式「神の慈愛的統治」概念に立脚しながら社会科学を展開していったことの持つ現代的意義は、神学に対して現代の社会科学との対話を可能にする場を示唆している所にあると言えないであらうか。もっともスミスの意図は彼の経験科学的理論が宗教・神学的議論に対し決して矛盾したり、反抗するものではない旨を立証するアポロジーク的な神学議論ではあつたが、人間救済 (Oeconomy) という神の目的実現の論理、神と人との間にあつてとりなしをなす仲介的實在の論理を社会領域に導入し、人間的営為と神の見えざる手が「この世で」共働しているという世界観・人間観をスミスは確認している。そこに社会科学の諸学を構築していたのである。

こうした点からスミス神学を見れば、価値創造の創源としての神学、特に倫理神学との接近を現代ほど切実に社会科学が要請している時代はないとすれば、そして積極的に生命感に満ちた人間価値に基づいた社会的施策への要

請は、地球資源の枯渇、環境問題の進行に伴い、今後ますます高まってくるとすれば、スミスが神学と経験的社会科学の共通領域で果たした役割は、示唆に富んでいるように思われる。

註

(1) 経済学の始祖としてアダム・スミスだと認めるのが通説となっているが、異説が無い訳ではない。一つには、時代に若干ながら先行して、物財の流通過程を血液循環システムに比して把握したフランソワ・ケネーの『経済表』を代表とするフイジオクラートに始祖的位置を与えるもの、またはスミスと同時代だが同じく先行したジェームズ・スチュアートに意義を与えるものもあるが、一般的には後の産業革命という経済社会の本質的分析という点でスミスに帰せられている。だが、独自の経済学史哲学に基づきスミスを『十大経済学者』の一人としても認めなかった学者に J・シュムペーター(一八八三—一九五〇)がいる。詳細については中山伊知郎・東畑精一共訳、シュムペーター『経済学史——学説並びに方法の諸段階』、第一四刷、岩波書店、昭和四二年、一〇〇—一〇七頁を参照されたい。

(2) ジョン・ウッズが四冊本の形で収集した一八九三年—一九八一年までに英語圏で刊行された雑誌論文一五〇本をみれば、その主題、分析方法、使用ディスプリンの豊富さ、研究者のフィールドの多様さにおいて、すでに社会科学の巨星とされている K・マルクス、M・ウェーバーに比肩するものであることがわかるであろう。ただし特にスミス研究には日本の事情のために戦前から終戦期までマルクス研究の隠れ衰としての間接研究が集中したという特殊事情があったことは、留意しておかねばならない。が、戦後スミス研究熱は衰退するどころかますます盛んである。日本のウェーバー研究の書誌では天野敬太郎(編)『日本マックス・ヴェーバー書誌』第二版、新泉社、昭和五十一年には一九七〇年までの一七三六点の本邦でのウェーバー関係研究の論文、著書が紹介されている。同様な本邦スミス研究書誌が九年後に再発行された。アダム・スミスの会(編)『本邦アダム・スミス文献——目録と解題』、東京大学出版

会、一九七九では明治二年から昭和五一年までの本邦で刊行された訳書も含め紹介されている。この二冊がその研究の求心性、厚重性、関心の歴史的持続性において比肩していることを十分に物語っている。

- (3) スミスは、天文学史、言語学史、修辞学・文体批判、芸術論、哲学史、形而上学、倫理学、法理学、政治学、経済史家、経済政策論に加えて自然神学を講じていた。スミスの伝記研究が、交友録や書簡、所蔵蔵書などから思想関心領域を跡付けている。そうした伝記的研究として大内兵衛・大内節子訳、ジョン・レー「アダム・スミス伝」、岩波書店、昭和四十七年を参照。

- (4) 一七五一年は先任者クレイギーが病氣のため代講者として道徳哲学を講じた最初の年なのであるが、最初スミスがグラスゴー大学に任用されたのは、一七五〇年に逝去したラウドン教授の論理学講座であった。前掲レー、五三―五五頁。だが、道徳哲学講座就任時の事情についての大学当局の議事録が R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein (ed.), *Adam Smith's Lectures on Jurisprudence, 'Introduction'* (Oxford, Clarendon Press, 1978), p. 1-2 に紹介されており、そこでは前任者のクレイギーよりもスミスの恩師 F・ハチスンの道徳哲学の枠組で講ずることをもてめた要請が書かれている。

- (5) スミスの道徳哲学がどのようなものであったのかを、最初の伝記記者であり自身もスミスと交友関係にあり、エジンバラ大学で道徳哲学を担当した D・ステュアートは、スミス講座受講生を尋ねて確認し、伝記に収録している。

- (6) 経済と宗教と言えば、先に触れた K・マルクス、M・ウェーバーが著名であるが、他にも重要な思想家としてアリストテレスと T・アクイナスが忘れられてはならない。例えば拙稿、「アリストテレス経済観の基本的視座——オイコノモス——政治神学の解体から経倫へ」『中部哲学会年報』Vol. 31, 三―四八頁を見られたし。

- (7) 英国の理神論史の代表的文献である中野好之訳、L・ステイーヴン『一八世紀イギリス思想史』（筑摩叢書一四五）中巻、筑摩書房、一九六九、二五―二五四頁にはスミスが記述されているが、スミスの時代には既に D・ヒュームを頂点とする反宗教・反神学の流れの渦中にあると説明されている。理性的信仰では神の存在が前提されており、神

の属性である全知・全能・全善の内、全知と全善性が認められ、信仰から倫理・道徳への傾斜が指摘されている。

松谷好明訳、T・ブラウン『スコットランドにおける教会と国家』、すぐ書房、一九八五、一九四―一九七頁参照。
 穏健派としてそこでブラウンが言及しているロバートソン学長とはハチソン在任中のグラスゴー大学学長であることは留意に値する。

(8) 前掲書、レー、五四三頁参照。

(9) 一七六三―六四期に受講した生徒のノートがAノートとして最初に発見され、スミス『諸国民の富』刊行二〇周年記念刊行の目玉となったのが、その前年一七六二―六三年期の受講生の講義ノート録の発見であった。この二冊を収録したのが前掲書 *Lectures on Jurisprudence* なのである。また一七五一年の受講生であったと考えられるアンダーソン・ノートも発見され、R. L. Meek, 'New light on Adam Smith's Glasgow Lectures on Jurisprudence' *Scottish Journal of Political Economy*, Vol. 33 (Feb., 1986), pp. 439-77 に収録されている。

(10) 前掲書、レー、六八頁参照。

(11) トビアス・スモーレットがその著 *Humphrey Clinker* に作定した人物マシュー・ブランドルが出会った啓蒙期のスコットランドの思想家の印象として、彼にそう口走らせていた。

(12) 星野彰夫「理神論をめぐるヒュームとスミス」『経済系』（関東学院大学）Vol. 132（一九八二）で理神論を取り上げ、その論文が第一部第四章として星野彰夫「市場社会の体系——ヒュームとスミス」、新評論、一九九四、八六一―一〇一頁に収録している。また一九八四年にはReinhold Niebuhr, 'The Religious Assumptions of Adam Smith', *Journal of Theology for Southern Africa*, Vol. 44 (May, 1983), 6-23。そして久保芳和「アダム・スミスの宗教観」『経済学論求』三八三（一九八四）および「アダム・スミスの宗教的立場」『国民経済雑誌』一五四―一六（二月、一九八六）が論じられ、久保芳和『スミス・マルサス研究論集』、大阪経済法科大学出版部、一九九六、三九―五六に収録されている。また一九八八年には宗教・自然神学に関する研究が続出した。酒井進「アダム・スミスの宗教

観」『専修経済学論集』二二—（一九八八）' また G. M. Anderson, Mr. Smith and the Preachers: The Economics of Religion in the Wealth of Nations, Journal of Political Economy, Vol.96-51, (1988), 166-88. など 拙稿 Ph. D 論文 'Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics. IN: Notre Dame University, Ph. D. Dissertation, 1988 などが論じることになった。

- (13) 田中正司『アダム・スミスの自然神学——啓蒙の社会科学の形成母体』、お茶の水書房、一九九三。ただしこの著書は一九九一年から一九九三年にかけて刊行してきた論文集から構成されているので、着想の時期はもっと早くからの著書『アダム・スミスの自然法学』、お茶の水書房、一九八八そして更に田中正司（編著）『スコットランド啓蒙思想研究』、北樹出版、一九八八をみておく必要がある。

- (14) 田中正司『アダム・スミスの倫理学——「道徳感情論」と「国富論」』、お茶の水書房、一九九七。iv 頁で述懐しているように、田中氏の多産的で精力的なスコットランド啓蒙研究の端緒は田中正司『市民社会理論の原型——ジョン・ロック論考』、お茶の水書房、一九七九年ではロック流近代自然法論を政治社会形成の始源として見いだしたことにあった。その到達点を系譜的に辿るといえるのは、思想的問題設定としても、しごく当然となろう。

- (15) 前掲書、田中『アダム・スミスの自然神学』、三—三三頁参照。

- (16) 前掲書、田中『アダム・スミスの自然神学』、iii 頁参照。

- (17) 前掲書、拙 Ph. D 論文 'Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics の研究成果に基づく議論展開。

- (18) 神の世界統治論を、スミスの恩師 F・ハチソンに見いだす研究は板橋重夫『イギリス道徳感覚学派——成立史』、北樹出版、一九八六、一七六—一八二頁参照、また佐々木純枝『モラル・フィロソフィの系譜学』、勁草書房、一九九三、二〇—二一六頁ではそうした神の世界統治が経験倫理学を支える枠組を整えたと指摘している。

- (19) 前掲書、拙 Ph. D 論文 'Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics, p. 84 参照。

- (20) 詳しくは前掲書『拙Ph. D論文』 *Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics*. p. 78^{参照}を
れたし。
- (21) 詳しくは前掲書『拙Ph. D論文』 *Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics*. pp. 117-128
を参照されたし。
- (22) 詳しくは前掲書『拙Ph. D論文』 *Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics*. pp. 61-67^参
照されたし。
- (23) 詳しくは前掲書『拙Ph. D論文』 *Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics*. pp. 85-91^参
照されたし。
- (24) 詳しくは前掲書『拙Ph. D論文』 *Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics*. pp. 127-128
を参照されたし。
- (25) 詳しくは前掲書『拙Ph. D論文』 *Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics*. pp. 130-131
を参照されたし。
- (26) 詳しくは前掲書『拙Ph. D論文』 *Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics*. pp. 159-160
を参照されたし。
- (27) 詳しくは前掲書『拙Ph. D論文』 *Adam Smith's Natural Theology and the Framework of Economics*. pp. 134-136
を参照されたし。